

「道南会」これからの進路

道南会会長 田沼修二

道南会会員全員と、函館市を始め道南に関係する団体や友人たちのご協力を得て、道南会の創立四十五周年を祝うことができましたことは、誠にありがたいことでありました。四十五年間続いたこの会を今後どのように継続して行くべきか、新たな発想が求められることとなります。

四十五年前、この会に結集した同郷の人々は、遙かに遠い故郷を偲び、たまたま同じ首都圏に生活する仲間として道南会を創りました。望郷の思いを秘めながら郷里の情報を交換したり、共に杯を交わしながら、首都圏での生活の潤いとしていたに違いありません。当時は、鉄道と連絡船の時代で、郷里への帰省もままなりませんでしたが、それだけに団結力も強く「ふるさと会」や「同窓会」に見られるいわゆる郷里への帰属意識も高かったように思われます。

しかし、四十五年経った現在は、航空

機の時代であり、帰省などという大げさな言葉もあまり聞かなくなりました。さらに、インターネットで郷里の情報が簡単に迅速に手に入るようになり、その結果「ふるさと会」や「同窓会」の役割が大きく変化し、同郷や同窓の若い後輩との連絡に苦労しているのが偽らざる現状です。幸いにして、道南会は、多年の活動の結果、幅広い豊富な人材を擁しています。その一方で会員の高齢化も進み、世代交代を図る必要に迫られています。ところが、幸いなことに団塊の世代が定年を迎える時代に入りつつあることは、世代交代を進める上で期待できる材料となります。新しい会員を増やすためには、同窓会などの組織を利用することが手取り早い方法ですが、それと共に道南会を更に魅力あるものにして行くことも大切です。今まで続けてきた月毎の行事に新しい企画を加えることも必要でしょう。

たとえば今まで多かった「お花見」「名園散策」や「見学会」「ハイキング」に加えて「展覧会」や「音楽会」など、ひとりでは出かけにくい催物の鑑賞などを試みてはいかがでしょうか。たまには「奇席」見物なども面白いと思います。また同好の方々で「カラオケ大会」を催せば「ゴルフコンペ」より多くの参加が期待できそうです。会員の皆さんの斬新なアイデアを期待して止みません。

次に、会員の皆さんから頂く年会費を値下げすることを提案しております。今まで四〇〇〇円の年会費で運営してきましたが、他の「ふるさと会」は三〇〇〇円が普通です。この際、思い切つて年会費を一〇〇〇円引き下げて、新しい会員が入会しやすくすると共に、現在の会員の負担の軽減を図りたいと考えました。しかし、会の運営に支障がないかを検討し、新しい対策を図ることにします。まず、会費未納会員に積極的に納付して頂くよう働きかけること。次に「四十五年記念誌」の出版費用は、会員有志や各同窓会、企業の皆様のご好意で広告を掲載させて頂き、広告料で賄うことができました。これを会報の発行にも広げて、新年と夏季の二回発行する会報に、会員有志や関係の深い企業の方々の名刺広告を掲載して広告料を頂いて発行費用を賄うようにする。これはどこの「ふるさと会」でも実行していることです。さらに、連絡通信

費の軽減を図ることなども検討したい項目です。

もちろん経費の節減に目を向けるあまり、会の活動が縮少したり、消極的になっては元もありません。新しいアイデアで新しい行事などを拡大する一方で効率的な事業の進め方を考える必要があります。

高齢化の進む時代の道南会の運営のために、取りあえず以上のような対策をとることとしておりますが、いずれにせよ四十五年の歴史を振り返りながら、新しい時代に相応しい道南会のありようを考え、実践して行くこころではありませぬか。すべての会員の力強いご協力を期待いたします。



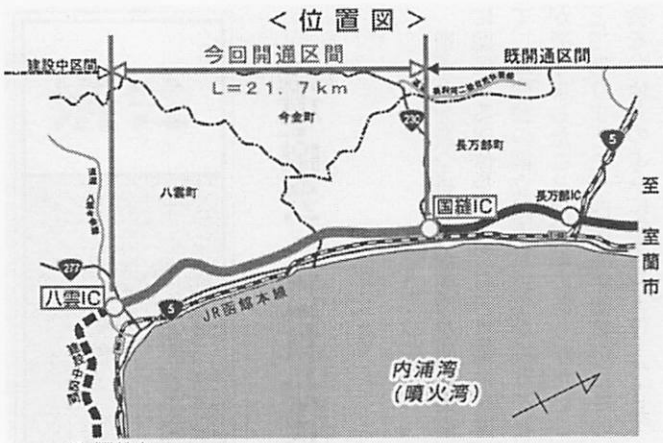
クリスマス・ファンタジー

最近の函館の話題から

道南においては、現在、北海道新幹線の開通に向けて順調に工事が進められておりますが、そのほかにも交通の高速化に向けた様々な計画が進められております。そこで、今回はそれらの取り組みなどについて紹介します。

高速道路、八雲まで南下

国縫—八雲間二十一・七キロ開通！
北海道縦貫自動車道の国縫—八雲間の二十一・七キロが平成十八年十一月十八日（土）午後三時に開通しました。



至 函館市

これで札幌南インターから八雲インターまでの間二一・八キロが二時間四分程度で結ばれることとなります。

この国縫—八雲間の開通により、道縦貫自動車道の道南部で残されている部分は八雲—大沼間の約四十五キロとなりま

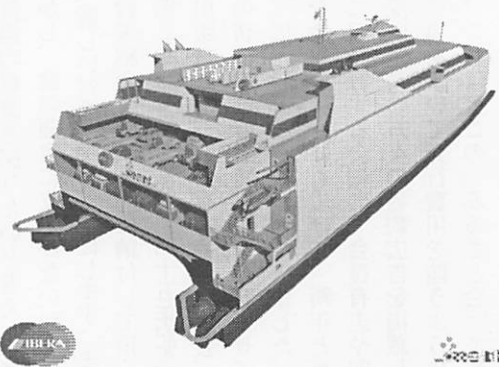
す。
これらの区間は現在、工事中、あるいは用地買収などが行われており、八雲—落部の約十六キロ間は平成二十二年、落部—森の約二十キロ間と森—大沼までの約九キロ間は平成二十四年に完成を予定しています。

東日本フェリー来年夏、青函航路に一時
間四十五分で結ぶ高速フェリー導入！

東日本フェリーを運営するリベラ（株）（広島県呉市）は、現在オーストラリアで高速フェリーを建造中ですが、これを来年夏に函館—青森航路に投入することを決定しました。

計画によりますと、平成十九年から二〇年にかけて、青函航路に、青森—函館間を一時四十五分で結ぶ新造船の高速フェリー二隻を投入するほか、現在の函館市港町のフェリーふ頭の整備や、新たなターミナルビルの建設も打ち出しています。

現在、青函航路には四隻のフェリーが就航していますが、大型トラックなどの



新型フェリー完成予想図

運送が中心で、運航時間は最大の「びいなす」（七二〇〇トン型）で約三時間四分程度で運行しています。

これが新しく投入される二隻のフェリー（八〇〇〇トン型）では、これまでより運行時間がおよそ二時間短縮されるほか、従来の貨物サービスに加え、旅客乗用車にも、重点を置いた新しいサービスが構築されることが計画されており、利便性が飛躍的に向上することが期待されています。

新しいフェリーはすでにオーストラリアで建造中とされており、第一隻目が平成十九年の七月か八月、第二隻目が平成二〇年夏に就航する予定です。

新外環状道路いよいよ着手へ

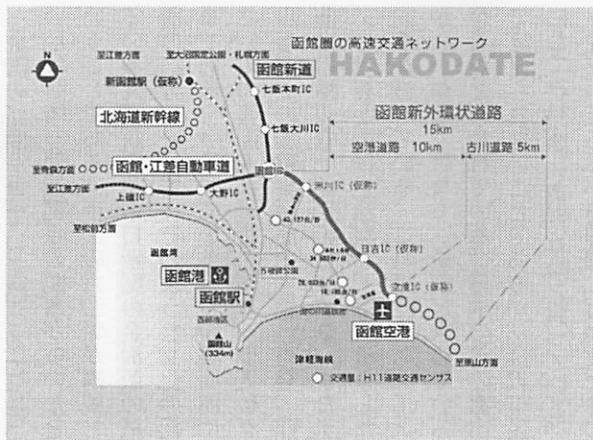
すべての都市計画手続き完了
国は、平成十二年十二月、新外環状道路の函館インターチェンジ（IC）から空港通りまでの約一〇キロを地域高規格道路の整備区間に指定。早期整備に向けた環境影響調査などが進められてきましたが、このほどすべての都市計画変更の手続きが完了し、事業着手を残すだけとなりました。

今回の都市計画変更により、四車線の一般国道自動車専用道路として整備されることが決まり、完成すれば、函館IC—空港IC間の移動時間は現在の三十二分から約八分となります。

赤川と日吉にそれぞれICが設けられ、

道道函館上磯線（産業道路）の慢性的な渋滞の緩和につながることも、函館新道と結ばれることで、北斗市内に予定されている北海道新幹線新函館駅（仮称）との陸上交通アクセスも大幅に向上することになります。

これにより北海道縦貫自動車道、函館・江差自動車道と合わせ、道南圏全体の高速交通基盤が強化され、利便性の向上に加えて各産業の振興、周遊型観光の強化など、さまざまなメリットが期待されています。



「産直フェア」賑わう

「北海道ふるさと会連合会」では、恒例の「産直フェア」を十月十二日から十四日までの三日間、新宿・西口の住友ビル前の三角広場で開催した。今年は、好天に恵まれ、二十三の出店に二万人の客が訪れ、約一千万円の売り上げを記録した。



北海道産の秋の味覚を産地直送で、鮭を始めとする海産物、馬鈴薯や玉葱などの農産物に乳製品など、いずれも来客の関心が高く、二日目は売り切れる品物が出るほどであった。道南から出店した福島町では「横綱の里」をキャッチフレーズでお客様の注目を集めていた。



産直交流広場より



「海峡の光」紀行

田沼修二

月刊「文芸春秋」十二月号のほぼ中央に綴じ込まれたグラビア広告の主題は「函館」である。平成八年に芥川賞を受賞した辻仁成氏の受賞作「海峡の光」に描かれた函館や津軽海峡と、函館西高に学んだ辻氏の思い出が取り上げられている。

「海峡の光」は、函館少年刑務所に勤める主人公と、そこで受刑者となっている小学校時代の同級生との運命的な再会を中心に展開する微妙な心理を、津軽海峡や連絡船、函館山などの思い出を織り込んで表現している。

ところで、辻氏は今はパリに住んで新しい創作に挑んでいて、パリ散策の途上でモンマルトルの坂に西高前の坂道を思い出したり、教会の尖塔にハリストス教会の尖塔の思い出が重なるという。そして十年前、西高あたりを柔道仲間であった中村勉氏（道南会員・弁護士）と歩きながら、お互いの将来を語り合ったことを思い出す。そのとき辻氏は、外国に出ると宣言し、中村氏はいつかこの街に戻りたいと言った。十年経って辻氏はパリに、中村氏は函館を地盤に政治活動を模索している。

広告のスポンサーはドイツの代表的な自動車メルセデスベンツで、グラビアにそれとなくベンツが写っている。

金沢にて函館を思う

金沢美術工芸大学学長 平野拓夫

金沢の新聞を見ていて感じることは、いかに芸術、芸能関係の記事が多いかということである。市民の九〇%が購読している北國新聞や中日新聞の金沢版の紙面の二分の一は常にそのような文化の記事である。今やっている21世紀美術館においての魯山人の展覧会から、少人数グループでの加賀宝生流の「謡」の会、作曲家の池辺晋一郎氏の音楽裏話、またナノの世界と市民生活など、毎日そうした記事が載っている。これは他にニュースがないからではなく、読者が求めているからだといわれている。日本の他の都市では見られないことであるが、金沢市民にしてみればごく当たり前と思っ

先だつてある小料理屋に行つたときに、出された器が綺麗だったので、女将に「どこで手に入れたの」と聞くと、はにかみながら「私が作った」という。「誰に習つたの」と聞いてみると、「ええ、北出生に教わっております」とさりげなく答える。北出生とは、芸術院会員で日本の巨匠である。その店で手伝っている女の子の声綺麗だったので、「歌手でも通じるね」といったら、「この子は金沢アンサンブルのコーラスのメンバーなの」ということで、俄然私はいろいろな話に広がりを持つことができた。掃除のおぼさ

んが横笛の名人だったり、時々新聞に掲載される俳人の交通整理のおじさんもある。こうしたことがいろいろあるところからつと存在している。

よく金沢のことをテレビなどで紹介されている兼六園や武家屋敷、金沢城、そして伝統工芸があるが、それとは別にここに住んでみて文化の深さとその当たり前さに感動している。一方、今世界的に有名になってきている金沢21世紀美術館は、その建造物は世界で最も権威のある建築コンクールでグランプリをもらい、一般に理解しにくいといわれている現代美術のコレクションは日本一であり、また世界的に著名なものも多数ある。しかし、何よりも誇れることは集客率が日本では群を抜いた日本一であるということである。創立二年目を迎え、延べ入場者数が三百万人に達したと発表された。

金沢は、京都と並ぶ日本の伝統文化の象徴の街でありながら、超近代の芸術を存在させる寛容さと進取の精神を持ち合わせている。まさに大きな文化を呼吸している都市である。先日パリ市のルーブル美術館の館長が来られたときに同席したが、手放しの絶賛であった。美術館の建物全体がガラス張り、床が庭と同一面で、内側は広い廊下になっていて、そ

こには「触つても、乗つても良い現代美術作品」が点在し、大声で騒いでも走つても良いことになっている。文字通り開かれた美術館である。そこにまず子ども達を無料で見学させたことで、子どもたちが大変興味を持ち、遠足に行つたような気分で大騒ぎしながら美術品に触れたり見たりしたことでもう一度行きたいと言ふ気になり、次は親を連れてくる子どもたちが増えた。親もまた、子どもたちと一緒に遊びながら美術を見ることができるようになった。このようなことが波になり、全国に広まりそのプラス相乗効果も、入場者数の増大につながつたのである。そしてこれはその子どもたちの体験から、大人になつてもその印象は消えず教養の形となつて身についていき、またその子どもへの伝承となつて文化が生まれる。旭川の旭山動物園の入場者数の急上昇も、子どもたちが今まで見たことのない動物の生態が見られる仕掛けもたらしたといわれている。

先日、ベルギーで第二のパリと言われているアントワープに行つたとき、やはり街の少し外れたところに馬具屋と鍛冶屋があり、子どもたちや観光客がそこに群がっていた。湯の川で育つた私が子どもの頃、学校帰りに馬具屋や鍛冶屋に立ち寄つて、日が暮れるまで見ていて親に叱られた。これが日課でもあった。今でもそれは明確に覚えていて、懐かしさと

もう一度時が戻つてほしいという気持ちになる。戦後、日本は物を中心として偉大な成長を成し遂げてきた。今、はたと気がついて心の喜びを取り戻そうと言う運動や行為が起つてきている。金沢の文化度の高さは、この心の伝承、伝統がきちんと継続されているところに深さを感じる。これらは決して演出して作られたものではない。

話は戻るが、小学校の頃に寄り道した馬具屋の親父さんが作ってくれた革の小箱は今でも大切に使っている。革製品のブランドに「コーチ」があるが、これはアメリカの開拓時代の馬具屋が作ったものがブランド化された。このような伝統と産業に結びついているのがヨーロッパや金沢の一つの柱である。函館のスルメもそうである。

以前、函館の人にそう話したら、すべてのことが「やっているよ」「前からあるよ」という言葉が返ってきた。しかし、行つてみると何も無い。お土産屋を中心とした店が並んでいて他の都市と何も変わらないものばかりで、大変寂しい。

しかし、函館にはまだまだ魅力のある心の里があり、文化の種はたくさんある。それを発掘して子どもたちと結びつけることを考えたりもする、視点を改めて成長させる策を考える余地がある。

湯の川小学校出身・道南会会員

切手の中の「函館」

沢株正始

二〇〇六年暮れの永田町は、郵政民営化騒動の後始末に揺れています。郵政改革によって日本の社会状況がどうなっていくかは時間をかけて見ていくしかないでしょうが、郵政公社ができてまず変わったのが郵便切手のデザインです。

日本ではこれまでに三〇〇〇種以上の切手が発行されていますが、これからはもっと増えていくと予想されています。最も困惑するのが、自分の顔や好きなものなどを写真に撮って公社に持って行き、切手に印刷してもらおう写真付き切手です。自分の顔が切手に印刷され、郵便物に貼られて通用するのですから、プリクラ



図1 日本開港百年記念10円切手

まず、一九五八（昭和三十三年）年、日本開港百年記念として十円の記念切手が発行されました（図1）。井伊直弼の銅像を中央に、黒船と横浜・函館・長崎の三市章が描かれており、函館が記念切手に登場したのはこれが最初です。函館郵便局ではこのとき十枚一組の記念葉書も発

行し、記念スタンプも作られています。続いて発行されたのは一九八八（昭和六十二年）年、青函トンネル開通記念で、青函トンネル用のED79電気機関車と道南と青森県の地図が描かれています（図2）。この時はこの六十円切手十枚を連刷した記念シートも作られました。



図2 青函トンネル開通記念切手

記念切手はこの二種のみですが、国立公園切手として一九六一（昭和三十六）年、大沼国立公園が採り上げられ、駒ヶ岳と大沼を配する典型的な図案の十円切手が出されました（図3）。全国で国立公園に指定されているところは四〇ほどありますが、北海道ではこのほかに網走とニセコ積丹小樽海岸、および利尻礼文が切手になっています。



図3 大沼国立公園切手

直接、函館や道南に関わる図案の切手は以上の四種のみで、東京や京都は論外としても、札幌関係の図案が多いことと比べると、いささか寂しい感じがします。例えば一九八三（昭和五十八）年に近代洋風建築シリーズとして二十種の切手が出されましたが、札幌が北海道庁旧本庁舎、札幌農学校演武場、豊平館と三種も扱われているのに、残念ながら旧公会堂など函館のものは取り上げられていません。



図4 ふるさと切手

建物や旧跡だけでなく、例えばいか漁や港祭り、あるいは市電や恵山の自然など、小さな紙片に「函館」がたくさん収まれば、観光都市函館のイメージは一層広がるのではないのでしょうか。

「伯爵いも」を知っていますか

田沼修二

秋の深まった頃、北海道の友人から取られたの馬鈴薯と大玉の玉葱が送られてくる。馬鈴薯は伯爵とメークインだが、馬鈴薯については一口メモが入っていた。

「伯爵」は、一九〇八年に川田童吉男爵がイギリスから函館付近の農地に導入し定着したもので、粉ふきいもなどに広く使われている。メークインは一九一七年にやはりイギリスから導入され、カレーライスなどに向いている。

ところで、昭和五十二年頃、私はNHK札幌放送局に赴任したが、地元紙に載った記事に興味を覚えた。それは道内の農業試験場で伯爵いもとメークインの長所を掛け合わせた新しい品種を開発したと言う記事であった。そこで早速伝手を頼って取り寄せて試食してみたが、確かに味も形も勝れた新種であった。新聞記事では伯爵の上を行くので「伯爵いも」と名付けるとあったが、その後の消息を聞くことはなかった。

頂いた一口メモによれば、この品種は一九七四（昭和四十九）年に釧路試験場で育成され、育ちが早く表面が白いことから「早白・ワセシロ」と呼ばれ、「キング伯爵・ワセシロ」の名称で市場に出回っているとのことであった。私が札幌に赴任した頃はまだ普及初期で珍しがられ新聞記事になったのであろう。

札幌を離れてからも馬鈴薯を口にすると、伯爵いもの行方を気にしていたがこれで一安心である。おそらく知らない間に伯爵を口にしていたのではないかと思っている。皆さんはいかがですか。

母校創立100周年記念行事に

参加して

函館西高つゝじヶ丘同窓会

東京支部 会長 新谷義克

我が母校、北海道庁立函館高等女学校・北海道立函館女子高等学校・北海道函館西高等学校は、今年創立100周年を迎え、十月二十一日に式典（函館市民会館）と祝賀会（五島軒本店）が盛大に開催されました。

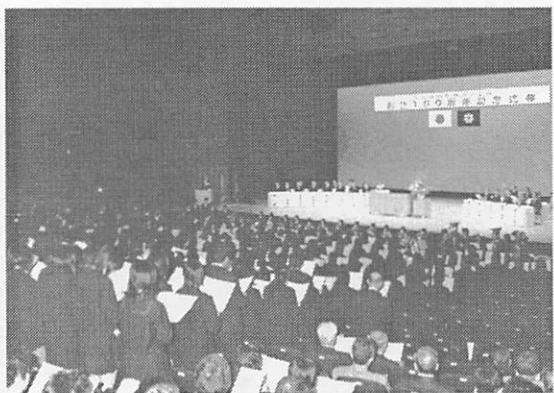
「庁立高女」先輩のご活躍や実績を糧に、我ら後輩も卒業生としてしっかりと後に続くことにより、現役の生徒諸君への励ましになればとの想いが、同窓会の源になると思います。

我が母校は巴の港から函館山に向かった「坂道」の上にあります。

正面の坂道を登り、校舎一階の出入口手前に「この坂から」の文字も鮮やかな創立100周年記念碑が建立されました。

「坂道」を登り、学問・情操・体育に励み、「坂道」を下りて家路に着くという学生生活が懐かしく思い出されます。

この「坂道」を通い、諸先生・諸先輩から大いに学び励まされました。



創立100周年記念歌「この坂から」の歌詞をゆつくりと詠めば、一つひとつの言葉が自分のために作詞された言葉のようで、身にしみる想いがします。

函館市民会館において、一六〇〇名が出席して行われた式典の中、母校の現役生徒諸君の「この坂から」の合唱を聞き、胸が熱くなりました。

我がつゝじヶ丘同窓会東京支部の活動も、母校を想い・故郷を想う気持ちを大切に、三〇〇名を超える会員が二年に一度集います。

同窓生が一同に会して上下関係の壁をなくした楽しい「母校愛」を大切に、この同窓会を永遠に続けていかなければと、の気持ちを一層強くしました。



五島軒本店で行われた祝賀会には、予想を遥かに超える七〇〇名の同窓生が集い、おおいに盛り上がりました。

特に、最後の校歌・応援歌の斉唱は、気持ちが一番昔に戻る瞬間であり、とにかく大声を出すことに迷いはなく、素直な気持ちになれる最高のひと時でした。

同窓会で、母校を思う気持ちと同様に、「道南会」での懐かしい声と「なまり」にまた逢うことを楽しみにこれからも頑張りたいと思います。

追記 つゝじヶ丘同窓生の皆様へ
記念事業の一貫として、「記念誌の作成」があります。記念誌は後から懐かしく思い出す物になると思います。お申し込みは早めお願いします。

平成十八年度夏季懇親会

九月二日(土)、午後一時から、東京・御茶ノ水ホテル「聚楽」で、今年の夏季懇親会が開催された。

福田裕子さんの開会の言葉と司会では始まった。最初に、田沼会長が「道南会は、今年で創立四十五周年を迎えた。これまでに、一月の記念総会を始め、六月のふるさと訪問旅行の実施、四十五周年記念誌」の発行などの諸事業を遂行することができた。本日のお土産として、記念誌をお持ち帰りいただきたい。なお、北海道ふるさと会連合会では、毎年北海道産の品物の即売会を行っているが、今年も十月十二日から三日間、産直フェ



アが行われる。これにもぜひお出かけいただきたい。また、明年一月に、役員任期が満了となる。私自身、最近体調不良でもあり、任期満了を以って会長職を退き、明年度より新体制で臨みたい」と挨拶した。

続いて、中村顧問の乾杯のご発声で乾杯、懇親会に移った。会の中では新入会員五人が板垣副会長から紹介された。

懇親会には、新旧会員九十八人が参加し、懐かしい函館弁が飛び交う中、会員相互の会話が弾み、大変賑わっていた。

会の最後に、沼崎副会長の一本締めで締めくくり、会員一同名残りを惜しみながら散会した。なお、懇親会には、函館市から昆布巻が、サッポロビールからはビールが寄贈され、参加者はふるさとの味とビールに舌鼓を打った。

なお、参加の会員にはこの日のお土産として、完成したばかりの四十五周年記念誌と函館市市勢要覧、さらに北海道製菓(本社・函館市)提供のお菓子セットが配られた。

このほか、七月に発行された函館在住の写真家・金丸大作氏が写真と文章で青函連絡船の思い出と記録を綴った写真集「青函連絡船の記録」(生活文化センター発行)が受付脇のブースで販売され、好評を得ていた。

菅原大作記

平成十八年度

夏季懇親会出席者

【参加者】

會田雅樹、安達昌子、阿部正身、荒木道雄、池上謹之助、石畑きね子、泉 龍夫、板垣寿見子、五十嵐英壽、内田みつる、大水和彦、小熊勝夫、小山内八重、小山 光、笠川雅彦、加藤信利、川守田孝平、川守田礼子、木谷勝子、帰山武志、小坂鉄雄、神山茂郎、小助川昭一、小島幸子、小谷泰三、小林寅雄、小林嘉則、小山和彦、小山慶子、斎藤勝美、坂本保子、佐々木 直、島田瑞子、新谷義克、進藤葵一、菅 愛子、菅原大作、菅原 靖、杉田博子、須藤珠美、瀬田松吉昭、高田和扶、高橋順吉、高橋 大、竹中裕行、田代沙智子、田沼修二、田村治雄、田村保子、田村 仁、田村良人、田村房江、橘家二三藏、千葉純子、鶴本支郎、照井陽子、土井真一、島本玲子、長島 康、中村隆俊、中村 勉、中村泰誇、納代鉄也、波間省三、榎木久澄、新山春一、西谷康紫、沼崎貞良、沼崎茂子、根来美和子、原田美恵子、原 ヒエ子、比嘉裕子、東川正秀、福島 紀、福田裕子、福津達男、藤山秀樹、二上達也、古井勝春、堀内洋子、本間和吉、松浦和彌、松田州平、松永幹男、三國比左男、葉袋 泰、南谷光一、三村寿雄、山本和子、山下弘治、山田克明、山名昭二、山本久子、渡辺一郎、渡邊宏司、渡邊丞二、渡邊喜子。

【同窓会活動状況】

- ◆ 東京幸会 十月二十八日(土) 三十一名
- ◆ 東京弥生会 十一月十一日(土) 十五名
- ◆ 三越日本橋店 十月二十八日(土) 一八七名
- ◆ 白楊ヶ丘同窓会東京支部 十一月十七日(金) 四十名
- ◆ 青山ダイヤモンドホール 十二月一日(金) 一九〇名
- ◆ 遺愛女子高同窓会東京支部 十一月十七日(金) 四十名
- ◆ アイビーホール書子会館 十一月十七日(金) 四十名
- ◆ 東高関東地区青雲同窓会 十一月十七日(金) 四十名
- ◆ 開催場所未定

新入会員紹介(夏季懇親会)

- 會田 雅樹 函館市東京事務所所長
- 進藤 葵一 沼崎副会長の紹介
- 西谷 康紫 函館市東京事務所副所長
- 小山内八重 前函館大谷高校同窓会会長
- 藤山 秀樹 駒場小卒

訃報
謹んでご冥福をお祈り申し上げます

橋本保雄様 平成十八年八月十一日逝去

道南会行事報告

★道南会ゴルフコンペ

道南会の第三回ゴルフコンペは、七月七日(金)、千葉県印西市の習志野カントリークラブクイーンコースで、会員二十二人(うち女性三人)が参加して行われた。この日はまだ梅雨明け宣言は出されていないが、季節はまさに真夏。快晴・微風、しかも強い日差しが照りつけるといふ道産子にとっては最も苦手な条件下ではあったが、参加者全員持てる技術を最大限発揮しての熱戦が展開された。成績は、小坂鉄雄氏が優勝。ベスグロは郷内繁氏が獲得した。

★サッポロビール千葉工場見学

夏の恒例行事、サッポロビール千葉工場の見学会は、七月二十二日(土)午後一時にJR津田沼駅に集合して、バスで



工場へ。最新設備が整備された工場内でビールの原料が様々な製造工程を経て加工されてビールができていくまでの一貫した流れ作業を詳しい説明を受けながら

見学した。その後、工場内に設けられている見学者用食堂で、工場内の案内を担当した女性がビールを飲むときの正しい姿勢や飲み方などについて見本を示しながらの実地指導(?)を受けた後、乾ききった喉を出来立ての生ビールで潤し、しばし歓談した。参加者 三十三人。

★猿島散策

十月十一日(水)

昨年計画して雨のため中止した猿島散策を再び行った。横須賀中央駅に集合した参加者は、早速三笠棧橋の発着所に向かい、シーフレンド号で猿島に渡った。夏は海水浴客で大賑わいのこの島も、



今はひっそりとしている。要塞だった島の切通しを通り、ひんやりとした暗いトンネルを抜けてお弁当広場に着いた。

暖かい陽の光を浴びて、東京湾を眼下に見ながらのんびりと昼食。ぐるりと島を一周の後、再びシーフレンド号で三笠棧橋に戻り、往復二十分のミニ離島航路の船旅が終わった。参加者 二十二名。

★東武動物公園遠足

秋の一日を様々な動物の観察と柔らかな日差しの中で童心に立ち返つての遠足を楽しもうということで、十一月二十一日(火)、埼玉県宮代町の東武動物公園を訪ねた。東武動物公園は、広い敷地内にボートを楽しめる大きな池や釣堀が配されているほか、ジェットコースター、大観覧車、ミニSL、メリーゴーランドなどの各種遊具を楽しめる遊園地ゾーンと



ホワイトタイガーやアフリカ象、カバ、ワニ、猿など多くの動物の生姿が観察できる動物園ゾーンとが併設されたレジャー施設。この日は、午前十一時に東武動物公園駅に集合して徒歩で公園に。昼食前に動物園内を散策した後、芝生の休憩スポットで、たまたま一緒になった小学生や幼稚園児が遊ぶ様子を見ながら、小春日和の温かな日差しの中でビールを飲みながらの昼食を楽しんだ。参加者 十五人。

★秩父・美の山ハイキング

十一月二十三日(日)

池袋から西武電車で約二時間、秩父鉄道の皆野駅で下車。二十分程歩くと登山口だ。枯葉で埋まった山道を登ること一時間半、見晴らし園地に到着した。

真っ赤な紅葉をバックに記念写真を撮り、美の山山頂に向かう。静かな山頂で昼食をとり、コンロで温めた燗酒で乾杯。下りは黒谷駅に降りることにし、細い山道を辿って里に向かった。参加者 七名。

会報「道南」十九年・新年号・通巻45号

発行 平成十八年十二月十五日

発行所 北海道道南会事務局

横浜市鶴見区生麦四一九一

十三一八〇三 川守田 気付

印刷所 (株)ソーラン社

中央区日本橋小伝馬町十六一八